第３２期新潟市社会教育委員会議

実施年月日	第８回　　平成２９年１０月１８日（水）実施		
会　　場	クロスパルにいがた５階　交流ホール２	傍聴人	１人
会 議 内 容	１．開会 ２．報告事項 （１）第５９回全国社会教育研究大会北海道大会　参加報告 （２）プレママ学校　視察参加報告 ３．協議事項 （１）第１７回新潟県社会教育研究大会阿賀野大会分科会について （２）第３２期社会教育委員会議建議の草案について ４．意見交換 ５．その他 ６．閉会		
出　席　者	【社会教育委員】 伊井　昭夫　　伊比　宗宏　　小川　　崇　　神林　むつみ　　雲尾　　周 田村　祐一　　鶴巻　清美　　横坂　幸子　　渡邊　喜夫 【事務局】 古俣教育次長　　三保中央図書館長　　緒方域教育推進課長 五十嵐中央公民館長　　大井中央図書館企画管理課長 松田中央図書館サービス課長　　今井生涯学習センター所長 生涯学習センター（鈴木次長補佐、井浦係長、本宮副主査、井部副主査、玉木主事）		

会　議　録

１．開会

（事務局）

皆様、本日はお集まりいただきまして、ありがとうございます。

ただいまより第32期新潟市社会教育委員会議第８回を開催させていただきます。

本日は、本間委員、南雲委員から欠席のご連絡をいただいております。なお、新潟市社会教育委員の会議運営規則第９条に定めます開催に必要な人数を満たしていることをご報告申し上げます。

本日の傍聴者は１名でございます。また、当会議につきましては、会議録作成の必要がございますので、録音と写真撮影をさせていただきますことをご了承ください。

それでは、開会にあたりまして、古俣教育次長がごあいさつ申し上げます。

（古俣教育次長）

改めまして、皆さんこんにちは。新潟市教育次長の古俣でございます。まずもって、委員の皆様におかれましては、日ごろより本市の教育行政にご理解、ご協力をたまわりまして、この場をお借りしまして感謝申し上げます。ありがとうございます。

昨年から２年がかりでご検討いただいております建議づくりもいよいよ本格化しており、すでにグループ単位で何度か打ち合わせを重ねていただいていることと思います。これから年末に向けまして、最終案の作成まで、またご負担をおかけすることになると思いますが、よろしくお願いいたします。事務局といたしましても、できる限りサポートをしていきたいと考えておりますので、ご要望がありますれば、ご遠慮なく、事務局に伝えていただきたいと思います。今期の建議におきましては、学びの循環による人づくりを推進していくためにはどうすべきかというテーマで取り組んでいただいております。委員の皆さんの豊富な経験と知識から作成いただく建議をバトンといたしまして、教育委員会がしっかりと受け継いで、本市の社会教育を進めていきたいと考えております。

本日も、限られた時間ではございますが、活発な意見交換を進めていっていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

（事務局）

それではここからは、雲尾議長に進行をお願いいたします。

２．報告事項

（１）第５９回全国社会教育研究大会北海道大会参加報告

（雲尾議長）

よろしくお願いいたします。

報告１をご覧ください。９月 11 日から 13 日まで北海道で開催されましたので、参加者として報告をいたします。

大会スローガン、研究主題は報告１の上部にあるとおりです。

１日目は、社会教育委員連合の理事会がございますが、まずその理事会に出席いたしまして、第１号、第２号議案で青森大会、兵庫大会に決まりまして、第３号議案は第 62 回全国社会教育研究大会の開催地区についてです。平成 32 年ということで今から３年後ですが、関東甲信越静地区が担当で、これは恐らく新潟県ではないかということで、一番関係あるところになるかと思います。あとは定款の変更等がございました。その後、毎年、事務局の担当者会ということで、次回の開催担当地区の事務局が、そういった実践報告や問題提起を行うという形で、３年くらい前から定例化されて行われています。

翌日は、総会がございまして、内容は理事会と同じです。そして、本体会議となります。この辺はほかの方の報告でご覧いただきたいと思います。

３日目は分科会となりますので、それぞれ第１分科会には井浦さんが参加されまして、第３分科会には南雲委員が参加されました。第２、第４、第５は同じ内容であり、私は第６分科会で「地域起こしの在り方と社会教育委員のかかわり」というものに参加しました。北海道が 121 人、北海道外から 24 人という参加者でありましたので、６人グループを 23 作るということで、私は第３グループに入っておりました。なお、新潟県の生涯学習推進課から参加されている方は、第１グループにたまたま参加されていました。足寄町の行政職員と伊達市の行政職員と、伊達市の方はほとんど写真撮影でいらっしゃらなかったのですけれども、鹿追町の中学校長と標茶町の元小学校教員と浦臼町のだれでも食堂を運営されている方のグループになりました。それぞれ、毎月、社会教育委員だよりというものを自分たちで作って発行しているところですとか、小さな町内活動を広げるとか、社会教育委員の認知度を高めるとか、町民の声をくみ取るとか、社会教育委員は頭脳や実行するコーディネーター、地域をつなげるコネクションが必要だとか、どこでも 400 円タクシーというものを過疎化しているところで運営しているとか、そういったようなことが 23 のグループのうちの六つでご報告いただいたと。そういう会でございました。

続きまして、報告２でございますが、南雲委員は欠席でございますので、こちらをご覧いただければといいかと思います。理事会、総会を除いた大会としては、一般の委員の方には第１日目となりますので、９月 12 日が第１日目となっていて、パネルディスカッションについてご報告いただいてあります。お読みいただいているように報告を展開していったというものであります。

最終日、第４分科会に参加されたということで、こちらも 176 名を 27 グループに分けて、自らの実践や我がまち・地域における取組みを紹介し合ったということになります。通学合宿や地域の参観日、見守り隊等がされているということでございます。

この報告１、報告２につきまして、ご質問等ありましたらお願いいたします。お分かりいただけましたでしょうか。

それでは、報告事項（１）を終了いたします。

（２）プレママ学校視察参加報告

（雲尾議長）

これにつきましては、報告３、４となります。９月 11 日開催のものでございますけれども、ここに参加された皆様からご報告をいただきたいと思いますが、まず事務局より概要報告ということで、こ

ちらをご覧いただきたいと思います。

（生涯学習センター副主査）

それでは、スライドを使ってご報告させていただきます。視察していただきましたのは、新潟市の中央公民館と新潟小学校の共催事業のプレママ学校です。全４回の講座になっておりまして、出産前の妊婦さんの仲間づくりが主な目的になっています。視察していただきましたのは、９月 11 日の新潟小学校で行われた第２回目になります。小学校で行われた命の授業という特別授業で、妊婦さんと助産師さんが講師になって実施した授業をを見学していただきました。

参加していただいたのは、小川副議長と横坂委員です。内容としましては、講師である助産師さんからまずお話がありまして、その後、妊娠５か月から 10 か月のプレママの方から、それぞれのお腹の中の赤ちゃんの様子をお話しいただきました。その後、妊娠 10 か月の妊婦さんのお腹に機械を当てまして、お腹の中の赤ちゃんの心臓の音を実際に聞いてみるといったこともありました。その後は、グループワークとなりまして、その中に各プレママ、妊婦さんたちが入ってお話をしてもらうと。そういった授業内容です。

こちらは当日の様子です。真ん中に立ってお話をしている方が講師の助産師さんです。その両脇に並んでいるのは、プレママ、妊婦さんたちです。最初に助産師さんがお話しされた後、妊婦さんのほうからお話がありました。手前で聞いている子どもたちは５年生なのですが、昨年までは５年生の一クラスでやっていたそうなのですけれども、今年は５年生全員が対象の授業になりました。昨年は新潟小学校の先生が講師だったそうですけれども、限られた時間の中で伝えたいことを凝縮して伝えるために、今年から助産師さんが講師になっていただいたということで、内容を少し変えながら実施しているとのことでした。

こちらはグループワークの様子ですが、子供たちに実際の赤ちゃんに重さも似せた人形を抱いてもらいまして、赤ちゃんの重さなどを体感してもらっています。こちらもグループワークの様子です。いろいろなことを妊婦さんに質問しながら進めていきました。子供のほうからは、「お腹の痛みを例えるとどんな痛みですか」というような質問があって、プレママからは「金棒で腰を叩かれているような感じ」というようなやり取りもありました。概要としましては以上です。

（雲尾議長）

ありがとうございました。では、参加された委員から視察の参考、課題等をご報告いただきたいと思います。まず、小川委員からお願いします。

（小川委員）

もう１か月前なのですね。参加させていただきましたけれども、概要は今、事務局から説明がありましたので、それでお分かりになったと思います。

私は初めて見学させていただきましたけれども、どういった具合になるのかなと思いましたけれども、意外とやはり新潟小学校で恐らく普段から話し合い学習みたいなことを盛んにやっているのかなという感じで、意外と子供たちは、最初は少しふざけているような子もいたのですけれども、真剣に話を聞いたり、質問をしたりしていました。恐らくどういう形かは分からないですけれども、プレママの皆さんが一生懸命話していることというのは、子供たちはしっかり受け止めているなという印象を持ちました。

（横坂委員）

全体的な感想としては、とてもよく準備された講座でした。それが公民館と学校コーディネーターの方、それから実際に話された助産師さんが何度も話し合われて、子供にきちんと伝わるように計画をなされたようでした。それにＰＴＡの役員も入っておりました。ですからすごく安定感のある授業で、これはずっと続いていって、循環になっていくなということが伝わってまいりました。実際にかかわってみますと、子供たちの参加度がだんだんと高くなっていて、最後は妊婦さんの周りにぴったりくっついている感じでした。

この裏側のほうに書いたのですけれども、妊婦さんと子供たちとの会話はとても、ここでしか聞けないなという、それは始まりからだんだん深まってきた最後の対話のところでいろいろな言葉が出て

きたのですけれども、女の子は、自分が妊婦さんになるという意識はあるので、質問も割と具体的なところを後半になって言ってくるのです。初めは男の子のほうが発言が多くて、興味があって、女の子は割と聞いて、自分に起こることとして聞いていて、後半になってから言葉が出てくるという感じは見受けられました。その中でここに例を書いたのですけれども、ある男の子が、僕にお母さんがいつかできたらというのは奥さんです。パートナーができたら、そのパートナーと赤ちゃんにやさしくしたいということ。そのパートナーという言葉を「お母さんができたら」という言葉がほほえましいというか、でも男の子にとっても、自分に起こることとして、現実的にこの授業は教えているのだなと思いました。ですから、学校の中で講座としてやっている。学校が主催して、学校の中だけでやっていると、今年はやるけれども、来年はやらないとか、ＰＴＡがやっているところはそういうことがよくあるのですけれども、でもこのようにしっかりとした土台がある公民館と学校とコーディネーター、ＰＴＡという四つのものが重なると循環していく可能性が出るのだなということを感じた視察でした。

（雲尾議長）

では、ご報告につきまして、あるいは事業等について質問がありましたらお願いいたします。

（中央図書館長）

私が言うのも何ですが、これは多分、10 年前から続いている事業だと思うのですけれども、これはそのときの校長先生のご厚意で始まりました。開かれた学校の一つの突破口として、プレママ学級と男の料理教室もやったのですけれども、プレママ学級は、そのときのねらいの中で、ママのほうも自分が産んだ子供がどのように成長していって、こうやって小学校に入っていくのだということの安心感を一つのねらいとしたのだけれども、ママのほうはどうだったでしょうか。それはやはり一方通行だったのでしょうか。ママのほうが、つまりこちらのお母さんのほうがどうだったのか。ただ、教えるだけだったのか、自分の産んだ子のことはとても心配なので。

（雲尾議長）

11 年経ったらこうなるんだねみたいな。

（中央図書館長）

それこそ循環だと思うのですけれども、ただ先生ではなくて、マタニティブルーではないですけれども、不安があると思うのですが、そういう不安が小学校に行けば、私が産んだ子供が学校でこのように育てられていくのだなという安心感もねらいの中であったと思うので、お母さんがどう思っておられるのかということは感じられましたでしょうか。

（小川委員）

そこはどうですかね。やり取りとしては、一方的にプレママの妊婦さんが子供に説明するというよりは、本人もやり取りをしている感じでしたけれども、お腹の子が 10 年後どうかとか、そういう感じの話は何かありましたかね。

（横坂委員）

その後、私はこれに出たお母さんと食事をしたりしたのですけれども、学校って自分が経験した小学校というのはもうずっと昔なので、今の学校ってこういう感じなのねと。非常に印象がいい感じで、開かれた感じなのだねということが実際にお話を聞いて、それが新潟小学校っていいねというような話を受けて、いやどこの小学校もいろいろないいところがあるからという話をしましたけれども、すごくオープンな感じだったのです、新潟小学校が。それをイメージとして感じたみたいでした。

（中央図書館長）

すみません、私はこんな話をする立場ではないのですけれども、昔の関係者としては、それが地域に住まう妊婦が自分の子供が入るであろう学校に行って、そのときの子供たちに話をする。そうすると自分たちの子もこうなるのだなというお互いの安心感みたいなものが一つのねらいみたいにあったので、それがどうなったかなと思ったのですけれども、妊婦さんがそのように感じておられるのであれば、もう一つの隠されたねらいは、達成されているのではないかと思うのです。すみません、余計なことを言ってしまいましたけれども。

（横坂委員）
すごくいいよく準備された会でした。
（雲尾議長）
そのほかはいかがでしょうか。
（鶴巻委員）
今、館長のお話にもありましたけれども、二つ質問をさせていただきます。
新潟小学校の５年生で命の授業ということで取り組まれているということで、授業の枠としては総合なのか、それとも保健体育なのかという、どのくくりでされているのかということと、当初、大体、プレママというのは、今、公民館でも、大体どこでも行われているのですけれども、それが小学校で行うというところがすごく、ほかのところとは違う特徴だと思うのですけれども、それがどのような、お互いのいろいろな思いがあって、小学校で開催されるようになったのかというところをお聞きしたいと思います。
（雲尾議長）
これは中央公民館長でしょうか。
（中央公民館長）
すみません、もう一度、質問内容を教えてもらえますか。
（鶴巻委員）
１番目は、命の授業なのですけれども、教科、科目としては、家庭科なのか、それとも総合なのか、保健なのか、どういうくくりで学校側がこれを受け入れているのかということと、公民館でプレママが行われていますけれども、それがなぜ小学校で行うようになったのか。
（中央公民館長）
後者の質問からですと、学校との連携、地域との連携の中で、私どもが学校のほうに入っていって、社会教育と学校教育が連携をしていきたいということで、学校のほうに入っていく出前講座の一つでスタートしたのではないかと思います。
前者のほうですけれども、学校側がどのように捉えているかについては、私はその辺りを存じあげておりません。
（雲尾議長）
命の授業だと、大体、科目としては何になりますか。
（伊比委員）
体育ですね。新通も４年生と５年生の二学年で今年やりましたけれども、体育でやりました。
（雲尾議長）
そのほかいかがでしょうか。何がどう循環しているかという中で、プレママと小学生とかかわってくるものと、あとは第１回から第４回までありますので、その全体の中でもお話もまた別途考えられるかと思います。どちらかがお使いになれれば、お使いになっていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。報告事項につきましては、以上で終了いたします。

３．協議事項
（１）第１７回新潟県社会教育研究大会阿賀野大会分科会について
（雲尾議長）
10 月 20 日に阿賀野市で行われます県大会分科会での発表内容につきまして、地域グループからご説明をお願いいたします。
（伊比委員）
地域を舞台にした循環型生涯学習グループで、伊井委員、本間委員、私伊比で、これまでに二度ほど、みらいずｗｏｒｋｓに集まり、検討させていただきました。発表当日は、本間委員から発表いただくということで、本間委員が準備したスライドに基づいて、ご説明を申し上げます。
まず最初に３人で考えたのが、循環型生涯学習ということは、よく言葉を耳にするのですけれども、

一体どのようになった状態なのか。まずイメージを共有しようという話をしました。その結果、「地域をフィールドに学びを循環する」ということになりました。どういうことかというと、一人の人が学んだことをまた一人がその学びを深めるということも大事なのだけれども、地域の中でたくさんの人を介して、人と人がつながっていくことによって、その地域に根づいた伝統であったり、文化であったり、風土というものができていくだろうと。そのように捉えて話し合いをしてきました。ただ、ご存じのとおり、学校というのは目に見えますし、イメージできます。社会教育施設も具体的なイメージが湧くのですが、地域といった場合に形として目に見えないものでございますので、お一人おひとりがイメージしている地域って小学校区なのか、町内会なのか、中学校区なのか、新潟市全体なのかというあたりが、私どももイメージをここで３人は共有したほうがいいよねということで、事務局からも交えて話し合ったのですが、その中で一般的にみんなが納得してくれる「地域」というのは、生活していく、生きていく中で影響を与えたり、影響をされたりするエリアというふうに考えてみてはどうだろうかというように一旦、結論を出しました。具体的なことはこれから話をしていくのですが、一人ひとりの学びを還元することが地域の人づくりにつながっていくのではないか。ご承知のとおり、循環型の生涯学習社会というのは、とりもなおさず地域の活性化であったり、人づくりであるわけですので、自分が持っている経験や知識や技能などをそれぞれがそれぞれの地域で人を介して根づかせていくということが人づくりにつながっていくのだろうと考えました。

具体的には、新潟市内にどんな例があるのか考えてみると、立松さんがにいがた子育ちステイションという法人を立ち上げるまでにゆりかご学級、自主サークル、子育てママ支援、ファシリテーション、社会福祉協議会の経験、それで今、皆さんご存じのこども食堂の立ち上げということになっているわけで、スタートは一人の学びだったのかもしれませんけれども、それがたくさんの方々とかかわる中で、ご自身の地域の中で、現在、こども食堂という形で、それを根づかせて活動されていると。これもやはり循環型生涯学習社会の一つの具体的な姿ではないだろうかと思います。

新潟市における地域による地域のための人づくり事例としては、今ほど、スライドでご紹介したこども食堂であったり、地域の茶の間であったり、地域と学校パートナーシップ事業であったり、コミュニティコーディネーターの養成講座等がこれにあたるのではないかと考えました。具体的に地域と学校パートナーシップ事業は、今回、全県の大会が阿賀野市であるのですけれども、新潟市というのは新潟県内、あるいは全国の中でも進んでいると考えています。具体的にどういうことかというと、コーディネーターが必ず各学校にいてくださったり、地域と学校を結んでくださったり、パイプ役をしてくださる。ほかの市町村においては、こういう例はまずないです。市町村でコーディネーターを置いていても、市町村全部の学校にコーディネーターがいるかというと、決してそうではございませんし、コーディネーターがいない分を学校の教職員が地域との連携を進めているというのが現状であります。ですので、行政、学校、コーディネーターという形で取り組まれている新潟市のパートナーシップ事業というものも、かかわってくださる大人の方々からの知の循環も含めて、一つの循環型生涯学習社会のイメージの具体的なものだろうと考えています。

この写真は、本間委員がかかわっていらっしゃるのですが、白根高校の生徒たちが新潟市の南区、白根をどんな地域にしていこうかと、高校生の子供たち自身が考えて、自分はどんなことにかかわっていけるのだろうかと。そういう講座を通しながら、自分も当事者であり、この南区を支えていく人材なのだという養成を行っているというご報告がありました。

年代別に見ていくと、私たちは10代から80代、現在80代以降100歳以上くらいまでのメモリが必要なのかもしれません。生涯各期をこのようにとらえて、地域とのかかわりを年代別に考えてみようかということをやりました。まず、義務教育期といって小中学校に行っている時代なのですが、地域への愛着や郷土愛の醸成ということを各学校でプログラムにもございますし、先ほど申し上げましたパートナーシップ事業等を通して実施をしています。自分の学びや能力を地域に還元する意識ということが継続していない、実行の機会がない。地域の方とかかわって教えていただいたり、体験はするのですけれども、それが即、自分が将来この地域をどうするかというところまではなかなか結びついていない現状があるのかということでございます。

それが終わって、高校生以降の青年期ととらえた場合に、広い世代とのつながりを求めていない。要は同じ仲間たち、同世代、それもＬＩＮＥをはじめとするＳＮＳ等での限られたつながりで十分だと。それがあるものですから、市や自分が住んでいる地域に目を向けているという高校生は少ないのではないかと捉えます。実際に、社会人になって勤めたりすると、ご承知のとおり、働き盛りの年代でございますので、地域にかかわらざるを得ない状況なのだけれども、積極的ではない。つまり自分が住んでいる地域はあるのだけれども、自分の家のある地域はあるのだけれども、朝早く仕事に出掛けて、夜、帰ってくるだけと、実際に地域とのかかわりには積極的ではない傾向があるのではないか。

高齢期の方々はどうかというと、時間や知識、技能はとてもある。公民館講座等でもご存じのとおり、非常にたくさんのご高齢の先輩方が学びに行かれています。学びは人のためよりも、ご自身の趣味の範疇で楽しくやっておられる方が多いようであると。自立し、生活し続けるために地域とつながる必要がある。一人暮らしの方であったり、いろいろな面で自分を支える地域とのつながりというのは保っていかなければいけないという意識が強いのは、やはり高齢期の皆様方なのではないだろうか。伝統を守らなければいけないとか、伝えたいことがたくさんあるとか、そういう思いが強いのも、この高齢期の皆様方なのではないかと考えました。

そこで、学びを循環するためにはどのようにすればいいのだろう。これが抽象的なのですけれども、黙っていてもできないだろうと。一人ひとりがイメージする地域の範疇というものも違っておりますし、影響を与え、与えられるエリアと申しましても、黙っていてもなかなかつながりが疎遠になっていますので、これはどうしても仕掛けが必要なのだろうなと考えました。具体的に仕掛けって何だろうねと考えたときに、やはり事業であったり、予算であったり、場所であったり、中心となる人材の育成だろうということになります。皆さんの地域ではどんな仕掛けがありますかということで、その分科会にご出席の市町村の社会教育委員の皆様方から具体例などをお聴きしたうえで、私どものほうで年末までにまとめる建議のところに、具体的に新潟市の現状をとらえて、こんな手立てというのが必要なのではないかというあたりが示していければいいかというところで終わっております。

（雲尾議長）

では、今ほどの内容につきまして、ご意見等ありましたらお願いいたします。

（鶴巻委員）

最後、意図的な仕掛けが必要ではないかというところで皆さんに投げかけるということなのですけれども、具体例などは、一つくらい提示はされるのですか。

（伊比委員）

私の説明が足りなくて申し訳なかったです。新潟市の取組みとしては、やはり仕掛けとしてパートナーシップ事業があったり、地域の茶の間があったり、こども食堂があったり。そういうお話をしたうえでと考えています。

（雲尾議長）

そのほかいかがでしょうか。

（伊比委員）

今日、ご意見をいただきたいのは、伊井委員と本間委員と３人で話をしているときに、そもそも一人ひとりが自分の学びを循環させたいと思っている意識がないのではないか。自分が経験したこと、得た知識であったり、人とのつながりであったり、さまざまな財産をお持ちの人はたくさんいらっしゃるのだけれども、それを地域の中で循環させて、人と人をつなげていこうとか、それが必要だという意識がそもそもないのではないかという話をしておりました。今やっている新潟市の取組みだけではその地域の人のつながりも、地域の中での循環型の生涯学習型社会は難しいので、今後、どんな取組みというか、手立てが必要になってくるかというあたりを、アイディアがあったらくださいということで投げかけようかという話をしておりました。

（雲尾議長）

ということでございますが、いかがでございますか。今、伊比委員の言われたことでいうと、先ほどの図の中でも、暮らしとか、学びとか、生活、働くなどありましたけれども、恐らく普通の人は、

働く、休む、遊ぶというサイクルの世界だけを意識して生きているわけですが、我々のいう学びの循環という中でいうと、こちらのサイクルも存在していて、学ぶことによって、それを生かしていくということです。そして、後進を育んでいくということが、循環型生涯学習の一つの循環だと思うのです。このときに、例えば、子供を例に取ってみると、子供は仕事が勉強だと言われるように、働くは学びに置き換わっているので、子供にとって循環型というイメージがすごくしにくいと思うのです。そこを大人が学んだことを生かしている姿を見せることによって、単なるこちらのことではなくて、こちらのことも考えていくということも一種のキャリア教育につながっていくのではないかと思っているのです。また、学校が例えば、地域への意識が希薄だといったときに、やはりできるのは総合学習ではないかと思うのです。総合学習が地域のことを学んで、自分たちが学んだことを地域にどうやって生かしていけるかということを、子供たちがどう表明できるか。学校の総合学習自体を子供たちが学んだ成果をまとめるだけに終わってしまいがちですけれども、まとめるだけじゃなく、まとめることよりもむしろまとめる過程の中で、自分たちが地域に何ができるのだろうかということをしっかり考えさせることこそが、循環型、子供たちが地域への愛着を育まれつつ育っていくことにつながっていくのだろうと思います。

開いたついでで申しますと、地域の話しなのですけれども、これは相当前の公民館運営審議会の提言なのですけれども、その中で地域をどう捉えようといったときに、これは公民館大会でお話しする話なので、公民館の数でいうと新潟市は 25 の公民館があるということで、25 の地域として公民館区と考えられるわけです。小学校区という地域もあるし、中学校区という地域もある。そして、コミュニティ協議会という地域もあるけれども、このコミュニティ協議会はそもそも自治会というさらに細かい単位に分かれているわけです。それから、市全体で統一的に地域という見方もできます。ですから、そのときどきに応じて、これらの単位が重層的に機能するものであって一時的に決められない。こういったような話で地域というものはスタートしているので、話のときによって変わってくるので、そのときのそれぞれの主体、かかわる人たちをどうイメージするかによって地域は設定できるだろうなと思っております。

開いた数字でいうと、もう一つは、地域とのつながりの仕掛けの一つでいうと、これが仕掛けの一つとして出せるかと思いますけれども、新潟市立内野中学校の１年生の集中総合学習なのですけれども、西地区公民館で普段活動しているサークルの人たちが中学校に出向いて、詩吟とか、大正琴とか、文学、英会話、箏曲といったようなものを各クラスでやっているので、子供たちは１日二つを選んで、その教室に参加すると。翌日も参加するという形で、公民館で普段学んでいる活動を地域の中学生に対して、中学生の学習に還元していくということです。子供たちとの関係がこれでできていく。子供たちもそのように大人が学んでいる姿ということものを見ることができるしという形の中で、最終日はまとめをしたりするのですけれども、こういったような仕掛けです。公民館での学びを地域に還元していくという、そういう一つの仕掛けの例として、出すとしたらこういったものを出せるかなと思うところです。

他にいかがですか。

（横坂委員）

子供たちと地域ということを考えても、地域にいるのは中学までですよね。高校からは地域にいなくて、それ以上になると大学はもう地域にいない。新潟にいない。そうすると、もちろんいろいろな経験も必要なのですけれども、縛りすぎるともう二度と帰ってこないみたいな気がしないでもないです。大人に関してもそうですけれども、縛りすぎるともう二度と来ない。もう二度と来ないという人たちは二度と帰ってこないみたいな感じが大人に関してはするので、大人と子供の地域というものの考え、大人のものを子供に押しつけると、何かそれも少し違うかなと思います。非常に感覚的なのですけれども、また戻ってきたくなるような地域の伝え方というか、あるものを自分の視点で押さえ込むのではなくて、また戻ってきたい地域の伝え方というか、具体的に言えなくて申し訳ないのですけれども、いろいろなものを伝承していったり、働き盛りの人たちにも参加してほしいというのは分かるのですけれども、自分たちのしたいことをその世代にしてもらうということもまた違うと思います

し、じゃあどうしたらいいのかとなると、やはり交流とまでは言わなくても、出会う機会がなければ生まれないと思うのです。出会ったときにあの人素敵だな、こういう人の傍にいたいなとか、そういうことでその人から持っているスキルを取得していくと思うのです。教えられたからではなくて、その場で共有することによって、その人の持っているスキルを吸収していく。それが自分の財産になり、地域の財産になっていくような気がするのですけれども、その出会いの場をどうしたらいいのかと。公共のことを考えれば、公民館のロビーの在り方はどうだろうかとか、学校の地域の人が集まれる場所はどうなのかとか、場づくりとか、あまり教えることや伝えたいことに集中すると、かえって逃げていってしまうような気がするのです。私個人の意見ですけれども。

（伊比委員）

いずれにしても、今、おっしゃったように、だれかが場所と中身を整えないと地域の人がつながらない。人と人がつながらなければ循環はしないので、やはり今、ご指摘のように場の確保であるとか、先ほどスライドにもあったのですけれども、そのようにきっかけを作る人がやはり必要。これを具現化しようとすれば、やはり必要なのではないかと考えました。

（伊井委員）

おっしゃるとおりで、私は何も言うことないのですが、議論の中にあったのは、今はつながらなくても生きていけるということが一番問題だという話があったのです。そのとおりだと思うのですが、インターネットもつながっていますし、何をやっても一人で生きていける。僕らの時代はそうじゃなくて、隣近所がいないと生きていけなかったのです。今はそんなことより、１人で十分に生きていける。そこにつながりの問題が出てくるのではないか。ではどうしたらいいのだと。特に男性はどうするか。女性は案外つながっているのですが、男性はつながっていないですね。特に僕らの時代、これから100歳も生きると言っていますからね、私などはあとまだ20年くらいあるわけでしょう。その間、生きている間にぼさっとしていてもしょうがない。ではどうしたらいいかというと、そこが生涯学習につながっていくものだと思われます。そういう議論がありました。皆さん何かいいアイディアがあったら教えていただきたい。

（渡邊委員）

私も大通コミュニティ協議会で役員の端くれにいるのですが、夏休みと春休みと冬休みはやはり場を提供して勉強してくださいというスペースを空けて待っているのです。小学生は来るのですが、中学生はほとんど来ないです。どうしてなのかなと思っていると、やはりいろいろな意味で忙しいのでしょうか。それともう一つは、やはり今、男性はどのようにつながっているかということがあったのですけれども、部活の上下関係というか、仲間意識というか、その面ではつながっていても、恐らく地域というところまでの余裕がないというか、そういったところで私は理解しております。

例えば夏祭りとか、あるいはこれから始まる秋の文化祭などで、作品を出品していただいて、地域で見てもらったり、あるいはオーケストラのような音楽隊に来て演奏してもらったり、いろいろなことをやっているのですけれども、一過性で終わってしまって、次から続かないというところがやはり現実としてあります。これは我々だけでいいのか、あるいは講師の先生方を招いて一生懸命そういう教育をしたほうがいいのかと考えております。

また先ほど、お話にありました郷土愛、要するに郷土を愛する教育はいろいろなところでやられているようですが、それが本当に身に結びついていないというか、なかなか難しい問題だと実感しております。ただ、地域と学校ということについては、私も防災士として、学校で話をさせてもらうのですけれども、その程度であとは出前授業とか、そういうもので子供との結びつきがなかなか少ないなと感じています。要するに一過性で終わってしまうことが非常に多いということが私の問題意識としてあるのです。出前授業などでいろいろなところで話をする機会があるのですけれども、呼ばれていってそれで終わりです。できるだけ生徒から感想文をもらったら、それに対するお礼状を書いて、私はこう思ったという手紙を必ず返信するということでやらせてはいただいていますけれども、どの程度反応があるのかということはまだ分かりません。そういった状態ですけれども、非常に難しい問題であるということは深く認識しております。

（雲尾議長）
他によろしいでしょうか。
では、協議事項（１）を終了いたしますが、今ほどの意見を踏まえまして、当日の発表をよろしくお願いいたします。

（２）第３２期社会教育委員会建議の草案について

（雲尾議長）
これにつきましてもまず事務局からお願いいたします。資料２をご覧ください。
（生涯学習センター係長）
第一章「生涯学習・社会教育をめぐる状況」です。まず最初に、国の状況といたしまして、国全体の流れといたしましては少子高齢化や国際化、高度情報化の中、全員参加による課題解決社会、持続可能な社会を求められる現状を述べました。
（１）では、第８期中央教育審議会で、平成 28 年５月に答申がありました「個人の能力と可能性を開花させ、全員参加による課題解決社会を実現するための教育の多様化と質保障の在り方について」の概要を述べました。
次のページの（２）では、「地域学校協働活動」を法律で位置づけるなどの社会教育法の改正について述べました。
（３）では、教育再生実行会議第十次提言「自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力」の概要となっております。
（４）では、2018 年度から５年間で取り組む第３期教育振興基本計画の概要となります。年内に答申が出る予定となっていますので、その概要となります。
国の状況は以上となりまして、続きまして、新潟市の状況となります。最初に教育ビジョンの取組みや生涯学習・社会教育分野での主な取組みを紹介しております。
（１）といたしましては、第 31 期の建議の関連施策の進捗状況です。こちらは現在、各課に依頼しておりまして、その取りまとめ結果を記載する形となります。
（２）といたしましては、今年度、市政世論調査に「生涯を通じた学習」という項目について八つの質問を加えていただくことができました。その結果について、述べさせていただいております。ま今後、書き足していく箇所もございますけれども、組立といたしましては、このような形で考えております。
（雲尾議長）
ありがとうございました。これにつきまして、お気づきの点やご意見等がありましたらお願いいたします。
中教審なのですけれども、諮問の書かれている部分よりも平成 27 年 12 月 21 日に出された 186 号でしょうか。地域学校協働活動が書いてある答申があるのですけれども、その中に地域学校協働本部であるとか、学校を核とした地域づくりであるとか、あるいは人々が学習成果を生かすということとか、そういうことが具体的に書かれているので、その文言を直接書いていただいたほうが分かるかなと思いますので、こちらの人材育成のところよりは、そちらのほうが分かりやすくなるかなと思いますので、その辺の引用もお願いしたいと思います。
（伊比委員）
12 月 21 日に３本出ているのですね。長いものですね。これからの時代における地域創生に向けた学校、地域、家庭の連携・協働の在り方。
（雲尾議長）
そうです。184、185、186 だったと思うのですけれども、最初が教員の人材育成で、次がチームとしての学校の在り方で、それが３番目です。その他いかがでしょうか。
では、次に、学校グループよりの説明をお願いいたします。
（田村委員）

私から資料３について説明させていただきます。３人集まってなかなか話す機会がなくて、まだ中身が練れていない部分がありますので、今後、練っていかなければならない部分があると思います。

学校を舞台にした循環型生涯学習ということで、新潟市の現状とすると、地域と学校パートナーシップ事業が平成20年ごろから進んでいるわけですので、ここの部分を現状として７点ほど書かせていただいております。課題というところですが、１、２として、３、４は具体的、個別的なところですが、１番の循環型生涯学習の実現に向け、子供たちにいかに地域の課題を理解させたり、そしてまず受け止めさせたりしていくか。そして、地域理解と受け止めた課題を現在や将来にわたっていかに地域に還元させていくかということが課題になってくるかなと考えております。あとは個別的な課題とすると、パートナーシップ事業ということで、地域教育コーディネーターの方からかかわっていただいたり、地域のさまざまな多くのボランティアの方々、地域住民の方からかかわっていただいているのですけれども、そこのところで新しい方がなかなか入ってこないといった課題を書いておきました。

そして最後のところ、裏面にいってください。提言というところです。学校を介して親同士、子供と地域住民などのつながりを作ると。先ほどのちょうど話の中で、地域を舞台にした循環型生涯学習という発表概要の中にもありましたように、やはり場づくり、人づくりというところが非常に大事なのかと思っています。やはり学校という場を通して、人を作ることを通して循環型の学びをいかに作っていくかというところで５点ほど書かせていただきました。学校を介して親同士、子供と地域住民のつながりを作ること。そして学校を舞台として、地域の自然や伝統・文化などを伝承・発展させていくこと。あとは教員の理解ということで、教職員の理解を深めていくこと。新しいボランティアを開拓する。それから、地域と学校パートナーシップ事業について、学校職員もそうですし、地域住民にどんどん理解を図っていくというところでまとめさせていただきました。今後またもっと練っていかなければならないと思っています。

（雲尾議長）

ありがとうございます。では、ただいまの説明につきまして、お気づきの点、ご意見、質問等がありましたらお願いいたします。

（横坂委員）

提言のところですけれども、学校を介して親同士というのは、具体的に何かありますでしょうか。

（田村委員）

先ほどの話にも似ているところがあるのですが、実際にもう親同士のかかわりというものも、例えば、小学校低学年とか、保育園だと、これは親同士かかわるというところは出てくる部分があるわけですけれども、では小学校中学年、高学年、中学校になったときに、今度は親同士のかかわりが必要なくなってきて、かかわる必要もあまりなくなってくる。そして、放っておけば親同士、ひいては地域住民がかかわる場というのがなくなってくるわけですので、やはり学校の中に親同士かかわる場を意図的に作っていくことも必要なのかということです。まだ具体化はできていないのですけれども、何らかの方法で親同士、子供と地域住民のつながりを作っていくということです。

（渡邊委員）

私のところの地元の小学校は、見守り隊を含めて後援会組織を２年前か、３年前かに作って、活動をしています。というのは、ＰＴＡはもちろんありますけれども、親同士は結局、子供が卒業するとある意味でばらばらになる可能性があるので、ＰＴＡとは別に後援会組織ということで活動しています。今、中学校のほうでも後援会組織を作って、学校をバックアップしようというような動きもあり、それも一つの方策かなと思いましたので、ご紹介させていただきました。

（横坂委員）

先ほどと同じところなのですけれども、学校という場所は学習の場だと思うのです、子供にとって。学校と家庭がある。そこの学校の場に親が入っていくことを子供たちは中学校だったりすると、そこを好ましいと思うのかどうかというか、学校でなければならないのか、学校というのは本当に難しいと思うのです。それを学校というのは地域の人が全員来ていますから、そこを使えばということはすごく分かるのですけれども、中学生の子供たちは、親たちが来る場として学校に来ることを好ましく

思うかということが少し気になったのと、学校は学校、うちはうち。学校というと親は学習が気になって仕方がないのです。できているか、できていないかとか。親にとって学校ってなかなかリラックスできる場所ではなかったりすると、もっとほかの場に学校が来てもらうというほうが交わりやすい気もするのです。

（田村委員）

ここの学校を介すという言葉を学校に集まるという意味合いも多少は含まれていますけれども、そうではなくて、学校という場が間接的でも、何らかの方法で親同士のつながりを作る。直接的に学校へ来てもらってということは難しいと思うのです。ただ、もしも今、放っておいたら地域がばらばらになっている部分がある。学校という何らかの存在を通して、親同士がかかわれるというところも必要になってくるのかなというところでここは理解していただければと思います。

（伊比委員）

学校支援地域本部事業、何ですかというあたりで、どういうことかというと、地域とか、保護者の方から学校を助けてもらうだけの事業なのか。パートナーシップという名前からいえば、地域から、保護者の方から学校がやってもらう代わりに学校も地域や保護者の方々にできることってありますよねという事業だと私は思っているので、そうすると国がやっている学びの拠点としての役割であったり、学校を核とした地域づくりという言葉の中に出てくるものであったり、地域のために学校ができることってすごく限られていることかもしれないのだけれども、地域のために学校ができることって、それぞれの学校の実態に合わせて考えてやっていかないと、今、田村委員からもお話があったように、すべて学校の中においでください。学校の中でやりますよということではないと思っています。

（鶴巻委員）

では、現場のコーディネーターから現場のことをお話しさせてもらいます。今、横坂委員がおっしゃったように、中学生はとても難しい年代です。特に学校から私が一生懸命作ったコーディネーター通信でも、生徒の手元に届くのは何割かなと思いながら印刷して、お手紙が届かなかったり、あるいは中学生、うちの息子たちもそうでしたけれども、恥ずかしいから学校に来ないでという年代で、非常に難しい年代だとは思うのです。私も、コーディネーター７年目をやっていて、小学校はボランティアが来ていただいて、児童の手助けをしていただくのはとてもありがたいと思います。でも、中学生はそれなりに背も大きくなって、体力もついてきて、ボランティアが学校に来て何というよりは、やはり先生がおっしゃったように、中学生なりに地域に何ができるのかということを考えて、一つの柱として活動しています。私たち、西川中学校の場合は、夏休みにものづくりの広場ということで、公民館との共催事業で10年以上続いているのですけれども、中学校の美術部の生徒が、地域の小学生に自由研究の一つとして、何か教えてあげるということで、昨年は玉ネギ染めを一緒にしました。今年は、風鈴の色づけをしたのですけれども、それが一つは中学生が地域にできること。もう一つはおまつりです。いろいろな新しい団地が出てきて、そこに子供が生まれて、親はそこがふるさとでなくても、子供たちはそこがふるさとになるので、やはりそこで伝承されている踊りなり、あるいはおまつりなりに参加してもらいたいというのが地域の思いです。どんどん高齢化していきますので、山車を持つ人なり、あるいはおみこしを担ぐ人なりがどんどん高齢化していくので、どんどんそういう若い力がほしいという地域の思いと学校の思いが一緒になって、今年は民謡流しだけではなく、傘ぼこを中学生が持って通りを練り歩くというところにも参加させていただきましたので、そういう形で学びの循環にはなるのかなということが一つ。

それから、私も中学校はのべつ幕なし人が来ていい場所ではないと思っています。やはりテストもありますし、いろいろな生活指導もありますので、私のコーディネータールームも一日中オープンにはしてありません。でも、中学校が学びの拠点づくりということでひとつやっている事業がありますので、学びの拠点づくりをどのように中学校で展開しているかといいますと、地域の方に来ていただいて、一つは健康増進教室ということで、給食の試食をしていただいて、西蒲出身のキックボクシングの元チャンピオンの方がいらっしゃるのですけれども、その方に来ていただいて、生徒と地域の方も参加して、一緒に汗を流すということをやっています。

もう一つは、ガラス工芸作家の方がいらっしゃるのですけれども、秋にその方に来ていただいて、美術部の生徒と地域の方から来ていただいて、一緒にガラスの作品を作るというような地域の学びの拠点という意味で、一つテーマを持った学びの拠点づくりというところで行うと、生徒も保護者も一緒に交流しやすい。それから、候補者も来やすいという活動を行っています。

（雲尾議長）

その他いかがでしょうか。画面に出しましたように、内野中学校の 25 キロウォークですと、保護者も公民館も参加ですので、学校の中では、保護者同士で一緒に参加しましょうかといって 25 キロ歩きますので、中学生とスタート順が違うのでずれはするのですけれども、歩いているうちに追いついたりして、それなりも交流も生まれたりしますし、公民館でいうと、西区を歩こう会みたいな公民館の参加サークルの人たちが申し込んで一緒に歩いたりする。普段の学びの成果を生かす場にもなっていたりという形の中で、後ろのほうのかなり疲れてきた中学生などを地域の人たちや保護者が励まして交流したり。中学生が若いから元気に歩けるはずだとは思うのですけれども、彼らのほうがかなり先にへばってしまったりとかしているところを大人が平気で歩くのを見せるというのが、ひとつあったりしますけれども、このようなことも循環で学校の行事の中です。普段の日常の授業だと人が入りにくいかもしれませんけれども、こういった行事ですと入りやすい部分があるかとは思います。清掃活動なども学校のグラウンドの側溝清掃などもＰＴＡ役員と子供たちが一緒に参加したり、今度、10 月 28 日（土）に新川まちおこしの会の主体のところに中学生が参加して、新川清掃も行う予定にもなっていますし。そんな形での地域での活動にも子供たちが出ていくことも、そこでの交流も生まれるかと思います。

（事務局）

１点、すみません。

今、お話をいただいているのが、建議で言いますと、第３章の新潟市の生涯学習の目指すところという章立てのところの学校教育、学校を舞台にした循環型生涯学習ということのベースを項目立ててお話をしていただいたと理解しているのですけれども、地域と学校パートナーシップ事業については、とてもうまくまとめられていると感じています。加えて何を言いたいかといいますと、事例研究というか、視察としてほっとハウス笹口を委員の皆さんからご覧いただきました。あそこは学校教育の現場に地域の住民という、地域の教育力を循環させているという現場でもありましたし、あそこの施設自体を地域住民の社会教育の活動の場としても使ってらっしゃいましたし、地域住民のある意味、居場所という位置づけにもなっている場所だったのかと感じてきたのですけれども、ご覧いただいて、そういうエッセンスが学校というくくりの中にあるのかどうかというお話しなども検討いただければうれしいかなと思いまして、発言させてもらいました。

（雲尾議長）

ありがとうございました。といったようなことも踏まえまして、後の意見交換の場でご協議いただければと思います。

（田村委員）

今後の進め方についてですが、提言なのでより具体的なところが出てこなければまずいわけです。例えば、もう少しこういう活動をどんどん増やしていきませんかとか、そういう具体的なところという形で出てくることが望ましいということですね。

（雲尾議長）

そうですね。今の１番の提言の一つ目にかかわって、これでイメージできない方が多いのではないかというような趣旨だったかと思います。

続きまして、社会教育施設グループより説明をお願いいたします。

（渡邊委員）

私ども検討メンバーは、横坂さん、神林さん、私ということで、３人でやらせていただきました。まず、現状と課題ということで、現状から話し合いました。先ほどもお話がありましたように、新潟市の取組み事例として「赤ちゃんタイム」や「プレママ学校」、これは先ほど発表がありました。あと

は小針青山公民館での「発達障がい講座」、あるいはヒアリングで中央図書館ボランティアの皆さんからご出席願っているお話をお聞きし、なお、生涯学習センターボランティアの皆さんからも現実をお聞きしました。その他いろいろと個人的に勉強したうえで、現状はどうだということで、まとめたのが（1）です。パソコン、スマートフォンなどによる独自学習で自己解決がされて、社会教育施設での人とのつながる学習参加が減ってきていると。あるいは高齢化、健康格差、あるいは経済格差、交通の不便性などによる利用者、あるいは団体の減少。もう一つは、やはり競合ということで、コミュニティセンターなどの他の類似施設が増加していること。あるいは職員と両者との接点が減少（非常勤職員への切り替え、あるいは指定管理などによる業務委託などによる接点が少なくなっているのではないか。五つ目は、図書館では貸出・返却業務のみならず、市民の生涯学習支援、あるいはまちづくり支援へと広がってきており、いろいろな場所でボランティアが活躍しているというようなことがあります。そのような中で課題としては、施設の利用者、あるいは利用団体の減少に伴う積み上げられた知識や経験、あるいはスキルの継承がだんだんと難しくなっていると。ボランティア間のつながりも薄くなって、だんだんと希薄になってきているのではないかという懸念。この二つが課題として出てまいりました。そのような中で、我々はどうしたらいいのかということなのですが、裏面になりますが、いいところもあります。社会教育施設、公民館や図書館などの公共施設の持つ強みは、知識と経験のある職員が配置されて、利用者の声に応えた講座を企画・実施することができる。職員を通して専門家によるサポート（講座講師やその知見を活用）を受けることができる。それらを勘案して、職員が調整役やときにはリーダーとなって、利用者や講座参加者、ボランティアの人たちにかかわっていくことで、利用者の仲間づくりやネットワークづくりが進むのではないか。仲間やネットワークができれば、循環が生まれ、蓄積された知識や経験、スキルが継承され、人は育っていくというような社会教育施設の強みがあるわけです。

そこで推進する提言といいますか、まずは環境づくりが大事だろうということで、経験豊富な社会教育主事の配置がどうしても必要であると。明るくオープンな雰囲気づくりに気を配り、利用者や講座参加者の価値観、情熱、利害関係を調整していくことが必要ではないか。

２番目、広いロビーや喫茶スペースと気軽に人が集まる。人々が集うことのできる場を設けたらどうか。３番目は出前授業など、在宅者や高齢者が利用しやすいアプローチを工夫する。それぞれの場所で活動している多様なボランティア同士がつながれる工夫をするというように、環境をどのように作っていくかということが一つの前提になってきたような気がします。２番目として、それらをどのように情報発信するかと。学習がされていない未学習者などに対する動機づけとなるような情報発信を行う。生涯学習の場としての公民館を市民は認識していないのではないか。ホームページや市報以外の告知方法はないか検討するというようなことです。

（3）施設間の連携。公民館でしかできないことはなにか。あるいはコミセンと一緒のほうがよい事業もあるのではないか。公民館とコミセンとの違いを市民は意識していないのではないか。市民課の窓口や出張等で、インターネットによる図書の貸出・返却の取り扱いができないかなというようなことがありました。

まとめとしては、学びの環境を作るには、まず動機づけ。要するに注目を浴びて興味を持たせる。そのためには動機づけが必要ではないか。それから学習に入って仲間ができて、仲間づくりのほうに発展していくのではないか。仲間づくりができれば、これからは今までの知識、あるいは自分の知見を活用するための実践活動、あるいはそこを通して別な人たちとのネットワークづくり、あるいはグループ同士のネットワークづくりというように、いろいろと前段階でのしかけ、工夫、アイデアが必要となってくるのではないかというようなことです。先ほどからご報告にありますが、いかにして循環させるかというところなのですが、なかなか予算の範囲とか、あるいは人の範囲とかというように制約があります。その制約の中でどのようにしてやっていくのかということが一番大きな問題で、いかに循環型生涯学習を達成するか、私どもでいろいろと考えて、こういうパターンはどうかというような中から総合して、皆さんとともにやはり考えていく必要があるなというように意見をお聞きしながら実感しているところであります。

（雲尾議長）

ありがとうございました。ただいまの説明につきまして、お気づきの点、ご意見、ご質問がありましたらお願いいたします。

１、現状と課題の（２）ヒアリングというのは、ヒアリングの成果をここに書くという趣旨ですかね。まだそこはで書けなかったということですか。

（渡邊委員）

そういうことです。だから、もう少し突っ込み不足というところもあるかもしれませんけれども。

（雲尾議長）

では、話し合いのほうで深めていただきたいと思います。

次は地域グループから説明をお願いいたします。

（伊井委員）

先ほど、伊比委員から話がありましたので、大体、お分かりだと思いますが、その前にここにファシリテーションをやったときの表がありますので、もしよろしかったら見ておいてください。これはどちらかというと、阿賀野大会の発表のためにこういう議論をしたもので、今現在、建議としてはまとまっておりません。ですから、皆さん方から意見を聞きたいというのが本音でございます。一応、３人の意見を出して、それをセンターのほうでうまくまとめてもらったものが、今、配布されている資料でございます。簡単にご説明したいと思います。

現状と課題というのは、そこに書いてありますとおりでございまして、大事な人とのつながりが現在、欠けているのではないかということが一番でございます。この現状を義務教育期間と、青年期、高齢期に分けるのがいいかどうかは分かりませんけれども、このように考えていくといいのではないか、こういう考えも成り立つのではないかということで分けてみました。

課題は何かというと、そこに書いてありますように、大人になっても生涯学習という考え方や地域の一員として担い手でもあるという意識を持てない。循環させるという認識を持っていないとか、そういうところが課題だろうと思います。また、循環型生涯学習を啓発及び普及・振興するためのキーパーソンが地域にいないということも課題だろうと。では、どうしたらいいかということは、つながらなくても生きていけるというような時代ですから、なかなか難しいのですが、そういうところに生きがいを見つけていくということになっていくのではないかと思います。

２番目が、新潟市における循環型生涯学習にかかわる取組み・活動の状況ですが、これは先ほど、伊比先生のお話にありましたので、あとで読んでいただけるといいかと思います。その三つ目に、生涯学習ボランティア育成支援事業が新しく加わっていると思いますが、生涯学習ボランティアバンクを設置して、生涯学習にかかわる豊かな知識や経験、優れた技能を有する地域の人材の登録と有効活用を図り、市民の学習活動の成果を地域社会に還元するものです。ボランティアバンクもいいのですが、匠の登録とか、そういう言葉のほうがかえっていいのではないか。匠だったら、ちょっとしたことが何でもできるというようなことを感じました。

（２）公民館と社会教育施設の取組みでは、先ほど言いましたように、コミュニティコーディネーターの育成講座。これは説明するまでもありませんが、白根地区公民館の例ともう一つは、うちの発掘プロジェクト。これは我々がヒアリングに行った例でございます。それから、市民がつくる市民講座ということで、申し訳ありません、これは関屋地区公民館で私の担当しているところでございます。何が書きたかったかというと、市民が作る市民講座ということで、公民館主導の講座ではなくて、市民が作って、市民が動いている。そこを言いたかっただけです。それで関屋モーニングサロンを入れました。

３番目は、地域での取組み。ふじみ子ども食堂は、先ほど、詳しく話がありましたので、これは省かせてもらいます。立松さんの学びの循環のいい例だろうと思います。次に、実家の茶の間も、現在436か所あるのだそうです。ものすごいものだろうと思います。因みに子ども食堂は昨年の11月に10でした。それが今10月現在で、17となっているそうです。

次が、推進施策（提言）です。これも同じように、三つに分けましたので、それに並行してこうい

うことはどうかということで施策を出しております。例えば、義務教育期は、地域と学校のかかわり、学校支援ではなく、本来の意味でのパートナーシップが必要ですよとか、支援だけでは子どもは地域を意識しなくなる。支援だけでは、子供たちは地域を意識しないですよということも書いてあります。

２番目は青年期。これがやはり一番の問題だろうと思います。ボランティア休暇やプロボノなどと書いておりますけれども、なかなかうまくいくものではないと思います。大事だと思いますが大変です。企業に働きかけ、協働による現役世代を引っ張り出すこと。先ほど言ったコミュニティコーディネーター、あるいはいろいろあるのですが、そういうものの勉強には社会教育主事講習を推薦します。企業などもなかなか参加者を出してはくれないと思いますが、企業の役にも立つと思っています。それからフォローアップ。こういう社会教育や生涯学習というのが分からない人が多いわけですから、やはり情報活動が必要だろうということで、積極的な広報活動を奨める。もう一つは広報だけではだめであって、フォローアップをしないとなかなか前へ進んでいかない。是非これだけはやっていきたいと考えています。

高齢期ですが、高齢期という言葉より、今は長寿社会と言ったほうがいいのかもしれません。皆さん 100 歳まで生きるというわけですから、どのように生きているかということも大事なことではないかと。

最後のまとめ、これが正直なところまとまっておりません。皆さんの意見を聞きたいくらいです。今回は実行あるプランを作らないと本来の姿ではありませんから、これは非常に抽象的でございますが、何かこの中から良いものがあれば、それにちなんだものを作っていきたいと。つながりが生まれれば循環が生まれる。地域に循環型生涯学習を定着させるための事業化、予算が必要です。地域にキーパーソンを養成し、地域で仲間づくりを推進する。つながりを作るキーパーソンは別に地域の人でなくてもいいのではないか。それぞれの学びがどのように地域社会に還元されているかという追跡調査が必要です。しかし、先ほど言った追跡調査が単なるインプット・アウトプット・アウトカム評価、成果に止まらず、学んだ人が社会にどのように影響を与えるかを評価する必要があります。評価しないと前へ進まないですね。長寿社会でどう生き抜くか。学習すれば地域社会に貢献したいという意欲がわき、貢献しているとさらにまた、学びたくなる。その循環社会では、できるだけ多くの人に役割分担する必要があるのではないか。はたしてどうやったらいいか分かりませんので、皆さんの意見をお聞きしたいという現状でございます。

（雲尾議長）

ありがとうございました。ただいまの説明につきまして、お気づきの点、ご意見、ご質問がありましたらお願いいたします。

先ほど、阿賀野大会のところでかなりご意見があったかと思いますので、この後の意見交換に進めたいと思います。

（事務局）

ありがとうございました。それでは、ここで若干休憩を取っていただいて、３時 40 分再開とさせていただこうと思います。休憩を取られてください。また、その間にレイアウトを前回のように変えさせていただきますので、手荷物は一旦お持ちいただいて、休憩を取っていただきたいと思います。あわせまして、用務がございまして、教育次長はここで退席をさせていただきます。

（古俣教育次長）

すみません、よろしくどうぞお願いいたします。

（事務局）

それでは、休憩に入ってください。

４．意見交換

― グループに分かれ意見交換 ―

５．その他

（雲尾議長）

その他連絡事項などはありますでしょうか。

（生涯学習センター所長）

１つは建議策定スケジュールについてです。

11 月 22 日（水）14:00 から今日と同じこちらの会場で小委員会を開催させていただきます。小委員会ではグループごとに建議の執筆を進めていただきますので、必要に応じてパソコンをご持参ください。出席者は委員のみなさんと事務局のみで、関係課は不参加となります。都合がつかないグループがありましたら、11 月の水曜日か金曜日で都合のつく日程を事務局にご連絡いただければと思います。

２つ目は来期社会教育委員の公募委員の募集についてです。

現在の第 32 期の皆様が来年平成 30 年 5 月 1 日で任期満了となりますので、第 33 期の公募委員を募集させていただくものです。任期は平成 30 年 5 月 2 日から平成 32 年 5 月 1 日までで、公募人数は２人以内です。11 月 19 日（日）の市報やホームページなどで周知する予定です。以上になります。

（雲尾議長）

その他委員の皆様から何かございますか。無いようですので、事務局にお返しいたします。

６．閉会

（事務局）

長時間にわたるご審議ありがとうございました。

次回は、11 月 22 日（水）14 時からこの会場で小委員会を行います。

以上をもちまして、第 32 期社会教育委員会議・第 8 回を終了いたします。

皆様、大変ありがとうございました。